

新羅都城の成立と展開

論文要旨

李恩碩

新羅は、韓半島のいわゆる「三国時代」以降、最も長い王朝体制(B. C. 57~A. D. 935)を維持した古代国家であり、慶尚北道慶州市の一带を都城として維持してきた。しかし、最古の歴史書である『三国史記』と『三国遺事』は12~13世紀に編纂された史料であり、高麗時代の視点から新羅史を叙述したため、初期の記録は考古学的な発掘結果とほぼ合致しないという結果が導き出された。

特に、重要施設の位置の考証は、文献に合わせて解釈されたり、朝鮮時代以降に指定された遺跡が新羅の歴史性を継承していると理解し、発掘結果で置き換えたりする傾向が見られる。

本研究では、新羅都城の遺跡と遺物について、発掘資料と史料を比較しながら新たなアプローチを試みた。

現在の蘿井は、第1代王である朴赫居世の誕生地として、朝鮮時代以降に指定された。しかし、発掘結果からは井戸ではないことが判明した。掘立柱建物が紀元前後から400年以上の間に2回の重複が確認され、蘿井が井戸の役割を果たしたとする解釈は説得力に欠ける。また、2~5世紀の期間に該当する遺物や遺跡も確認されていない。さらに、7世紀末から8世紀代に築造されたと推定される八角形建物につながる連続性も証明されていない。近隣の昌林寺址に初期王宮があったという『三国遺事』の記録は、発掘の結果、確認されていない。むしろ発掘の結果によると、現在の蘿井は祭場としての役割を果たした可能性が高く、構造からみて南郊であった可能性を提示した。

新羅は隍城洞一帯で初期の勢力基盤を整え、積石木槨墓を築造することから、4世紀代半ば以降から周辺の小国を統合し始めた。百濟、高句麗、倭との継続的な対立と侵入を防ぎつつ、6世紀代には王権の強化と体制整備を通じて古代国家の枠組みを確立した。

初期の王城である金城の概念や場所について、史料の分析と、周辺遺跡と地形などを考慮

し、その位置を隍城公園内部の低い丘陵地と推定した。記録上に見える南堂も、やはり当初は離宮的性格の月城内部に建設され、最後に登場する586年ごろまで継続したと考えた。そして、昔脱解の瓠公との月城争奪説話は、隍城洞の製鉄勢力が月城を占める過程を美化したものであると分析した。初期記録と考古学的証拠資料は時期的に整合せず、一連の内容は3～4世紀代に設定すべきだと考える。

金城から月城への移転を経て、528年には仏教の公認、553年には皇龍寺（神宮）の建立が行われた。また、漢江流域の占領を通じて中国との交易路を確保し、積極的な交流が行われた。

最近、発掘が進められている月城において注目された「人身供犠」については、調査地域の上層と下層を区分すれば不要の議論であったが、これを同じ工程と見なしたため、研究者に混乱をもたらせたものと考えられる。また西門址が発見されなかった点については、門の痕跡が失われたのではなく、もともと城門が存在しなかったことを示すものであり、その前に統一新羅時代の建物が建てられていることも、これを証明している。

新羅において553年、真興王代の都において、王権の象徴となる建造物（新宮）を建設することは、東北アジア諸国の流れに沿ったものであった。真興王が新宮の地に皇龍寺を造営したのは、意図的な計画の下で「王即仏」という概念で三金堂を一行に配置したものであり、これは真平王と善徳女王、真徳女王まで続いた。善徳女王も釋迦族の王女であり、聖骨系統を受け継いで即位すると、すぐに芬皇寺三金堂を造営した。女性であるという限界から「品」字配置型式、釈迦牟尼仏を安置した中金堂よりは一段階下がる東西金堂を造営する形となったが、その後、このような三金堂配置が新羅社会において造営されることはなかった。絶対王権の象徴であった皇龍寺は、中央金堂に丈六尊像、東金堂に塑造丈六尊像（あるいは薬師如来仏像）、西金堂に天賜玉帯を配置し、「王即仏」を示した。その絶頂期として、善徳女王の時代の645年に築造された九層木塔は、新羅三宝として皇龍寺の完成を示し、新羅都城においてもっとも重要な王権と国家の権威を象徴する場所であったことが証明されている。

皇龍寺の配置は、非常に緻密な測量に基づくものであり、思想的背景と理念を反映した形で築造された。この寺院を中心に都市計画が推進された。朱雀大路の概念は、南北の道路が王朝儀礼の軸線に合わせて計画されたものであったが、結果的に王宮ではなく寺院となったことにより、実質的に朱雀大路は築造されなかったことが分かる。

史料に記録されている「龍の出現」という表現は、慶州で実際に竜巻が吹いたことを意味し、6世紀半ば以降、皇龍寺と都市が整備される後、龍に関する記録は減少した。龍は従来、王や王権と関連づけて象徴的に解釈されてきたが、本稿では「竜巻」という自然現象の

存在を取り上げ、新たな解釈を試みた。

皇龍寺の建立後、約200年かけて都市が完成したが、その過程では自然地形に合わせて道路の幅や築造方式が多様であり、坊の規格も時期によって異なることが分かった。同様に、地方の九州と五小京も、自然条件に基づいて都市が築造された。これは中国の基本的な概念が導入されつつも、半島国家の特徴として文化が消化され、変形したことを示している。

676年に三国を統一した後も、都を遷さないまま、扇状地内で王宮の月城を中心に再編された。月城中央地域には正殿が位置していた可能性が高かったが、発掘された建物址の構造から見て正殿の役割ではないと判断される。史料に登場する東宮、臨海殿、北宮、南宮、龍宮について再検討し、これらの位置について新たな解釈を提示した。具体的には、東宮は管理機関である東宮衙と共に月城の東南側に位置し、北宮は善徳女王によって創建された芬皇寺の東側にある苑池に存在し、南宮は月城の正南側にあった可能性がある。また、皇龍寺内部にある新羅最大の井戸を龍宮と推定した。宗廟は月城の東側である狼山一帯に、社稷は月城の西側である現在の財買井址一帯であるという新たな解釈を提示した。

8世紀代の中後半以降、禅宗思想の影響により、南山に150カ所以上の寺院が建設された。また、都城内でも王族や貴族などの個人のための寺院が都心地に建てられるようになった。『35金入宅』は「金」で飾ったり、「金」が入ってくる富潤大宅という従来の解釈とは異なり、金仏像があつたり、金殿がある家屋を指すと考えられる。坊内部に回廊や講堂、南門など寺院の基本施設がなく、塔と金堂を備えた王京S1E1地区の第1家屋、味吞寺址、天官寺址などがこれに属すると考えられる。ほぼ同時期にあたる760年、春陽橋と月淨橋の建設は南山への道をつなぐ橋施設であり、いずれも王宮とつながる地点にあり、これらの橋を管理する官庁も存在したことを発掘資料から提示した。

新羅は505年に氷庫典を設置するほど氷の需要が高く、百濟からの低温貯蔵庫と氷庫の築造技術が統一期に導入された可能性が高いと考えられる。単純な竪穴氷庫から財買井址の方形石垣氷庫や九黄洞苑池遺跡の六角形氷庫など、石垣氷庫が造営され始め、宮にはすべて氷庫が備えられたと推測される。このような氷庫の技術は、朝鮮時代まで受け継がれたと考えられる。

新羅の遺物のうち、これまで用途不明とされてきた滑石については、日本の遺物と比較した結果、初めて温石として使用されたことが確認された。これらの製品は8世紀代から唐でも容器や実用品として広く愛用され、茶や薬などの貿易品と関連性が高いと考えられている。新羅においては、まだ滑石の産地が発見されていないことから、原石や加工品として多くの滑石が貿易船の舶載品として輸入された可能性を想定しておきたい。日本では古墳時代から滑石製の遺物が多様に使用されており、大宰府からも多量の温石が出土している。ま

た、奈良など他の地域でも出土が確認されており、鎌倉時代だけでなく江戸時代全般にわたっても出土例がある。

新羅千年の歴史の中で、史料や考古学的資料を通じて当時の生活を明らかにできるものは、全体の5%にも満たないと考えられる。型式と枠組を整えた後、古代の歴史を理解するアプローチは、現代的な視点から解釈される可能性がとて高いことが分かる。また、「人身供犠」という概念においても、当時の社会では平凡で一般的な条件、耕作地ではなく、低湿地（泥層）や不毛の地に下層民の墓が造成され、これが月城の城壁築造と関連し、新羅の殉葬（永遠不滅の神仙思想）と同様の役割を果たしていると解釈されている。このような部分は客観的な観点による再解釈が必要である。

以上、王宮や官庁、皇龍寺など重要建物の位置と役割などについて、発掘された考古学的資料や史料を活用して新たな解釈を試みた。史料が不足し、中国や日本の古代都城と形成過程が異なっており、新羅都城への適用が困難な点も多い。現時点では、発掘・研究された成果を総合的な観点から考古学的に解釈し、古代史の政治的観点ではなく、新羅人の生活像に重点を置きつつ当時の様相を再現することを試みた。これによって新たな研究の地平が開かれることを望んでいる。